▲福間南小学校学童保育所で子どもたちに震災の歴史を伝える齋藤さん

未曽有の大災害 東日本大震災に学ぶ

今からおよそ13年前の平成23年3月11日に発生した東日本大震災（以下、「震災」）。この未曽有の大災害で被災した人々は地震発生後にどのように暮らしていたのでしょうか。「東日本大震災を伝える会」の語り部として、また被災者として、震災で起きたことを人々に伝えている齋藤直志さんに、当時の状況と、災害時に心掛けるべきことを聞きました。

問い合わせ　市防災安全課☎0940・43・8107

想像を超える大津波に飲み込まれていく街並み

当時、宮城県南東部にある亘理（わたり）町に住んでいたのですが、震災が起きる前は、災害に対して楽観的に考えていました。避難用持ち出し袋は準備していなくて「災害が起きたらテントを張って住めばいいか」などと考えていました。

仕事中だった午後2時46分、携帯電話に緊急地震速報が通知され、地鳴りとともに立っていられないほどの揺れ（震度7）が発生。その後、震度5を超える余震が何度も繰り返され、爆発音や複数の火の手が上がりました。しばらくして地震の揺れは収まりましたが、高台にいた私の目に飛び込んできたのは津波が松林や家屋を飲み込んでいく姿でした。想像を超える津波が押し寄せたことで人々は混乱し、土砂は崩れ、家屋や道路はなくなって橋が落ち、逃げることもできなくなっていました。

妊娠中だった妻 携帯電話も使えない

妊娠6カ月だった妻は病院にいて、津波の危険性があったため建物の4階まで垂直避難していました。ものすごい渋滞で迎えに行くこともできず「アパート（自宅）で合流しよう」と連絡したところで携帯電話がダウン。自宅で待機していたところ、消防団の再三の避難指示があり避難所に移動しました。

苦しい避難生活に疲弊

避難所では毛布も待機するスペースもなく、水を流せずに便が溜まり、用を足すこともできませんでした。妊娠中の妻が耐えられる環境ではなく、氷点下の寒さをしのぐために膝上の海水をかき分けて自宅2階へ毛布を取りに戻り、避難所で車中泊をしました。ガソリンも乏しく車の暖房を使うこともできませんでした。

その後も余震は繰り返され、すぐ避難できるように靴を履いて寝たこともあります。ただ、次第に、避難指示が出ても逃げず、睡眠中30分おきに余震が来ると「もう楽になりたい」と思いたくなるほど疲弊し、平常心を保ち続けることが難しくなるほどでした。

断水が続き、自衛隊が設営する風呂に入れたのは2週間後、水が出たのは1カ月後のことで、途方に暮れながら、自宅の大量のがれきを撤去しようとしますが、埋まった釘やガラスなどが邪魔をして、前に進むことも、足を踏み入れることもできませんでした。

親族や友達が犠牲に まずは自分の命を大事に

難病を患っていた親族の一人は、避難先で亡くなってしまいました。また、多くの友達が行方不明になっています。

震災から2カ月後に遺体で発見された友達は、避難中のおばあさんを助けようとして津波に飲まれてしまいました。「明日にでも夫がふらっと帰ってきそうな気がして部屋はそのままにしている」。その友達の妻は、現実を受け入れられていませんでした。

「誰かを助けたい」という気持ちは誰しもあると思います。ただ、震災では、誰かを助けようとして自分が犠牲になっている人が相当数います。職場に避難してきた同僚の話では「おばあさんが走って避難していて、車に乗せるかどうか迷った。でもバックミラーを見ると津波が迫ってきていたので、そのまま車を走らせた。津波は振り切れたけれど、おばあさんの姿は後ろにはなかった。あのとき僕は止まるべきだったのだろうか。おばあさんの姿が頭から離れない」と言っていました。でも、もし、おばあさんを助けていたら津波に飲み込まれていたかもしれません。「助けたい」という気持ちは分かるけれど、まずは自分の命を大事に行動してほしいと思います。

多数の犠牲者に学ぶ 避難訓練の重要性

宮城県では、昭和53年6月12日に宮城県沖地震が起きてから毎年6月12日に避難訓練をしていて、宮城県民は高い避難意識を持っていました。

しかし、震災の1年前にチリ地震が発生し、宮城県沖に3mの津波が来ると報道されて住民は避難しましたが、実際に到達した津波は30～50㎝。津波が来るという警報や報道があれば避難所に行くのが当たり前だったけれど「報道は大げさだ」という気の緩みにつながってしまったのか、震災によって1万5千人以上の死者と2500人以上の行方不明者が出てしまいました。

多数の犠牲者が出た中、岩手県釜石市の犠牲者は0人で「釜石の奇跡」と言われています。釜石市は入り組んだところだから津波が高くなり「津波が来たら逃げなさい」というのが周知徹底・訓練されているからこそ犠牲者は出なかったのです。でもそれを「奇跡」と言うのではなく、それが当たり前の社会にしていかないといけないと思います。

次世代に伝える努力を

犠牲になった人たちが生きたかった明日を、私たちが生きているのだから、次の世代の明日にしていくような努力を私たち大人がしていかないといけないと思います。災害を経験してきた大人たちが、その経験を子どもたちに伝えなければなりません。遠い国の出来事のような話に思えるかもしれないけれど、震災で起きたことを次の災害に生かしてほしいと切に願います。

犠牲になった人が生きたかった明日を私たちが生きている

特集 高めよう!! 地域防災力

※写真は昨年の一斉防災訓練

福津市一斉防災訓練

福津市一斉防災訓練を実施 昨年は約1万人が参加

福津市一斉防災訓練は、毎年11月5日の「世界津波の日」直後の土曜日に実施していて、今年は11月9日(土)に実施します。

訓練は、まず、西山断層を震源とした地震の発生を想定し、シェイクアウト訓練をした後に、地域の避難所での集合点呼を行う全市民対象の必須訓練を行います。それから、各郷づくり推進協議会や各自治会が独自で創意工夫して実施する任意訓練の2部構成となっています。令和5年度は、必須訓練の参加者が1万人、任意訓練の参加者が2900人を超えました。

◀シェイクアウト訓練の3つの安全行動(画像提供:効果的な防災訓練と防災啓発提唱会議)

まずは「備え」そして訓練への積極的な参加を

災害の被害を軽減するには、災害への備えを心掛ける必要があります。また、発災時には、一人一人が自らの命は自らが守る意識を持って行動する「自助」、地域住民や企業などが連携して互いに助け合う「共助」、行政による「公助」を組み合わせて対応することが必要です。

まずは、防災行政無線や緊急速報メールを合図に、各家庭や学校、事業所など、それぞれの場所でシェイクアウト訓練をした後は、地域が行う参集訓練や任意訓練へ積極的に参加してください。

昨年度の任意訓練では、自治会単位で段ボールベッド組み立て訓練や、防災士による講話、支援物資の配布訓練などが行われました。また、地域住民と小・中学生による救命訓練や、水消火器訓練、中学生ボランティアなどによる防災非常食の調理といった、創意工夫を凝らしたさまざまな訓練も行われています。

11/9(土) 福津市一斉防災訓練と 11/17(日) 福津市総合防災訓練を 実施

地震や記録的豪雨など災害発生に備えた対策は、市の最重要課題ですが、ひとたび災害が発生すると、行政ができること「公助」には限界があり、住民にとっては、まず自分自身の身の安全を守る「自助」や、地域やコミュニティといった周囲の人たちが協力して助け合う「共助」の取り組みが非常に重要です。住民参加型の市一斉防災訓練と官民の防災関係機関の市総合防災訓練とで、普段からの地域の防災力を向上させましょう。

災害が起きたときに正しい行動がとれるように

令和6年能登半島地震などの災害を踏まえ、西山断層を震源とする「地震」をテーマにして、福津市が大規模な被害を受けた場合を想定した防災訓練を実施します。

この訓練は、災害対策基本法、県や市の地域防災計画などに基づいて、福津市で地震が発生したという想定の下、県や消防本部などの防災関係機関との連携強化や防災技術の向上を図ります。

また、市と地域住民による訓練を基本とし、市民に広く防災意識の普及啓発を図り、民間の事業所などの関係機関との連携訓練となります。

開催日は11月17日(日)で会場はイオンモール福津の駐車場です。昨年、イオンモール福津で開催された「防災デー」に倣い、今年度は福間南地域郷づくり推進協議会、イオンモール福津、市が共催し、他にもたくさんの参加機関を加え、規模を大きくして開催します。

「自助」「共助」の観点からも、地震が発生した直後の避難行動要支援者を含む地域住民の避難訓練と避難所運営訓練などの住民参加型訓練を実施します。当日は、自衛隊、宗像地区消防本部、市消防団、医療機関などの訓練だけでなく、電気やガス、電話、インターネットなどのライフライン機関の展示もあります。ぜひ来場し、正しい防災知識を得て、災害が起きたときに正しい行動がとれるようにしましょう。

訓練参加機関(順不同)

宗像医師会(宗像水光会総合病院)、県北九州県土整備事務所宗像支所、九州電力送配電株式会社、西日本電信電話株式会社、西部ガス株式会社、JCOM株式会社、トヨタカローラ博多株式会社、ソフトバンク株式会社、大塚製薬株式会社、イオンモール福津、市社会福祉協議会、陸上自衛隊、自衛隊募集案内所、県警察本部、宗像地区消防本部、ふくつ防災士会、市消防団、福間南地域郷づくり推進協議会、福津市

※写真は昨年のイオンモール福津「防災デー」

福津市総合防災訓練